

に、末盧国は唐津平野に、伊都国は糸島平野に、奴国は福岡平野に比定され、不弥国は嘉穂盆地とする説が有力である（第12図参照）。また、これらのなかで伊都国や奴国の「王」墓と考えられる大形の甕棺墓からは大型の中国製銅鏡が多量に出土しており、ほかのクニの「王」墓に比べ、より高い富の集中度がうかがえる。つまり、各クニのなかでもその国力に差異があったことが推測される。

このような北部九州の後期のクニグニも、古墳時代に入るとしだいに畿内勢力のなかに組み込まれていく。

## 第二節 豊津の弥生時代の遺跡

豊津町内では、弥生時代前期後半から後期末に至る集落や墓地などの遺跡が三〇程度確認されている。生産活動の中心となる水田は祓川流域の沖積平野で、前期の段階に既に開発されていたと考えられる。集落はこの沖積平野の縁辺部の微高地や河岸段丘上に所在し、墓地は更にその外縁部の低丘陵上に営まれる傾向がある。

集落は、現在のところ拠点となるような大規模な遺跡は確認されておらず、数軒からなる分村的なものしか発見されていない。また、長期間継続するような集落も確認されていない。

墓地については、後期に属するものが明確になつていて、徳永川ノ上遺跡では周溝で区画された内部に数基の埋葬施設を持つ墳丘墓が一〇基集中し、銅鏡や玉類のほか鉄製の武器や工具を副葬するものがあり、当

地域の首長層の墓地であると想定されている。

## 一 德永川ノ上遺跡

徳永川ノ上遺跡は、豊津町北東部で祓川右岸の洪積丘陵上に位置している。京都平野の東側には、周防灘に面した長井浜との間に広がる低丘陵群があり、これに祓川がぶつかって流れを北に向ける地域が大字徳永地区で、祓川に面する遺跡の位置が標高二四メートルから三〇メートルで、対岸の水田地帯との標高差が八メートルもある。

遺跡が立地する丘陵は、祓川に沿つた南北に細長い丘陵で、南端の丘陵基部に神手遺跡、丘陵の尾根が変わって北側に鋤先遺跡、居屋敷遺跡などの徳永遺跡群に含まれる重要遺跡が祓川に沿つて南北に連なっている。実際には、南側の神手遺跡内の弥生前期の環濠集落にあたる地区は小字川ノ上に属し、古墳群が小字神手地区に広がっている。徳永川ノ上遺跡内では、南半分の弥生前・中期集落と古墳群が小字川ノ上に属し、北半分の弥生終末集落と墳墓群が小字果願寺に属して鋤先遺跡の大半と同じ小字になつてている。

### 発掘調査の契機と調査方法

により、福岡県教育委員会が建設省九州地方建設局から委託を受けて実施された。調査期間は、昭和六十三年度から平成二年度まで実施され、一万二五〇〇平方メートルがその対象面積となつた。発掘調査に先立つ遺跡分布調査では、小字川ノ上地区に古墳の残骸数基と弥生土器が散布し、果願寺地区に低墳丘が数基確認された。遺跡分布範囲を確定するために試掘調査も実施し、道路幅全体の一万二五〇〇平方メートルが発掘調査対象面積となつた。

発掘調査方法は、調査対象が道路幅に

限定され、しかも用地買収と工事計画の都合によつてA～Eの五地区に区分して不規則に実施せざるを得なかつた。本稿

で紹介する弥生終末から古墳初期の墳墓群は、北側果願寺地区のC～E地区に所

在する。C地区の調査は、古墳群の調査

が先行し、その下部に存在する墳墓群と繩文・弥生遺構が最終段階で行われた。

E地区の南西側に未開墾地区があり、こ

こに低墳丘の墳丘墓が確認されていたこ

とから、機械力を使用しない完全な人力

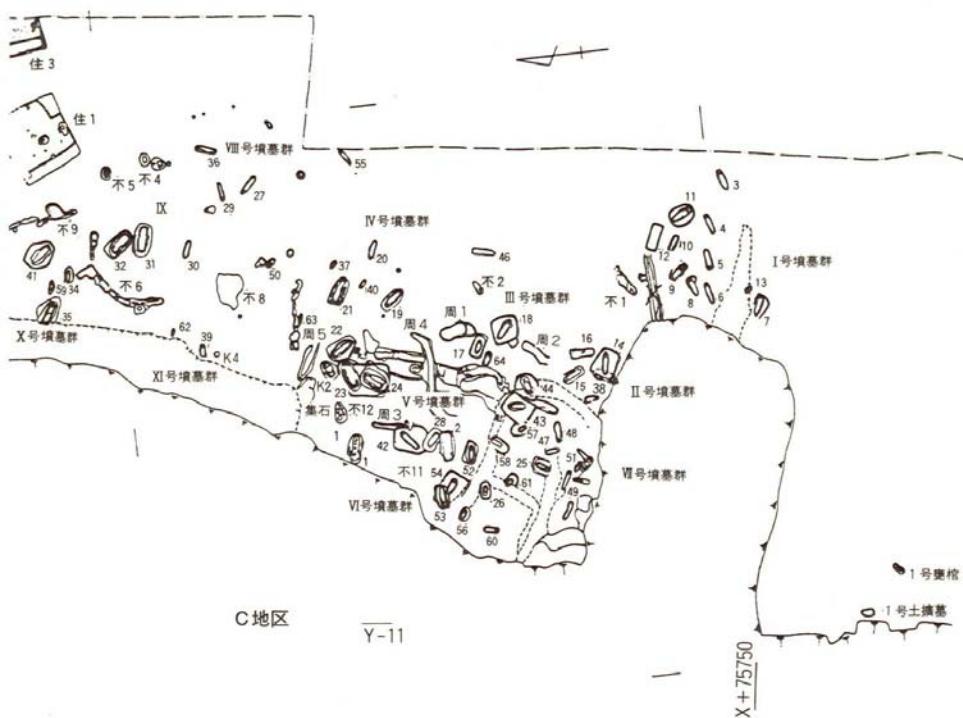
発掘となつた（第13図参照）。

### 遺跡の概要

C地区では、古墳の残骸が残つていたものの、ほ

ぼ完全に近く開墾されていてことから、

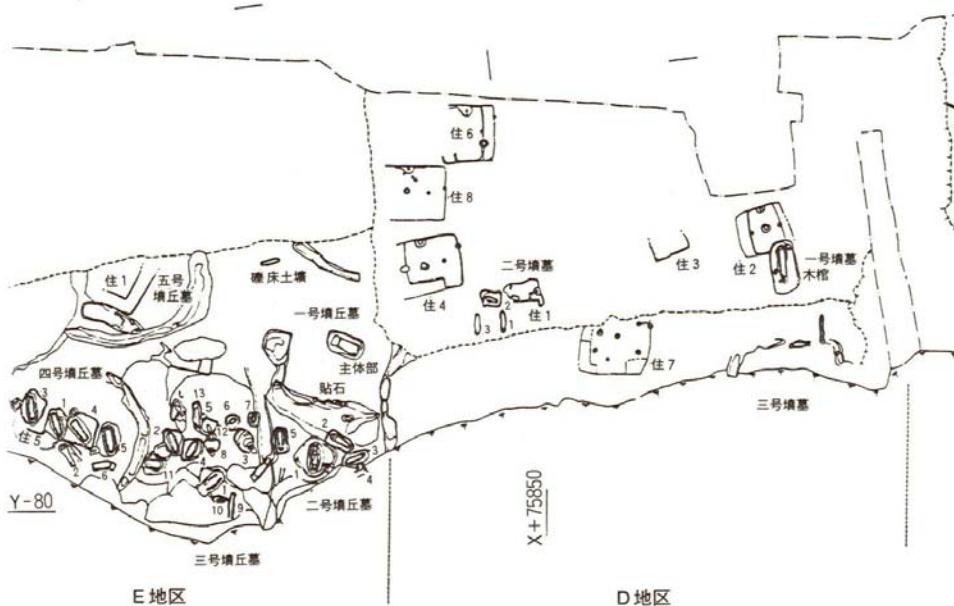
弥生墳墓群の大半が上部を削平され、軽



### 第3章 弥生時代

微なものが墳丘を、大破したものが墓壙や石棺材まで抜き取られていた。弥生墳墓としては、調査した甕棺墓三基・箱式石棺墓七基・石蓋（木蓋含む）土壙墓五二基の合計六二基が周溝や区画された群として独立する墳墓群を形成していた。

これをI～IX号墳墓群として群構成を想定したが、これらのうち確実に墳丘墓として認定できるのは、I号・III号～V号・IX号・X号墳墓群とした七基（群）で、周溝をめぐらせたり、他群から独立して群を構成している。C地区の墳墓群からは、副葬品として、I号墳墓群5号墓で鉄劍、6号墓で方格規矩渦文鏡片・素環頭刀子、8号墓で三角縁画像鏡片・耳飾り玉類・手首飾りガラス小玉、13号墓で両耳飾りの玉類と刀子二点、III号墳



第13図 德永川ノ上遺跡実測図

墓群で小形仿製鏡片（第20図の2参照）と鉄剣、IV号墳墓群19号墓で三角縁盤龍鏡・刀子、20号墓で玉類・刀子、VI号墳墓群42号墓で超大型鉄製釣針五点、大型透孔付鉄鏃・刀子、小型鉄鏃が出土したが、六二基中の四割の一五基で鉄器を持つなど内容の高い墳墓群である。完全に荒らされた箱式石棺墓をもつIX号・X号墳墓は、周溝をめぐらす橢円形墳丘墓に復原できることなどからも、副葬品が鉄器だけでなく鏡なども持つていた可能性があるだけに、内容の豊富な墳墓群である。墳丘墓の墳丘形態としても、IX・X号墳墓群の橢円形に対し、これに先行するI号・III号～V号墳墓群の四基は周溝などから隅丸方形であり、弥生終末期の中で円形墳丘墓の出現が確認できる。なおC地区では、少なくとも先行するI号・III号墳墓群と共に存していた弥生終末の竪穴住居群があり、北側のD・E地区にも分布している。したがって、弥生終末の古段階に集落が営まれていた一角で墳丘墓の造営が始まり、後の弥生終末新段階になると集落を意図的に破壊して埋め戻し、後の墳墓群を造営し続いている。

D地区では、弥生終末期の竪穴住居跡が埋没した後に造営された墳墓二基が確認された。一基は南側に位置する舟形木棺墓を主体部とするが、墳丘や周溝が検出されなかつた。しかし、主体部の規模と一定空間を占有することから一基の初期古墳として墳丘の存在を考える。その北側には、石蓋土壙墓三基が意図的に一字形に配置され独立する一群があり、これも墳丘の存在が考えられるが周溝など完全に削平されていた。副葬品は、石蓋土壙墓一基から管玉一点と他の墓から土器片が出土しただけである。

E地区では、調査前から四基の低墳丘が確認されており、隣接した開墾地から試掘で検出されていた墳丘が削平されて周溝のみになつていて一基を加えて合計五基の墳丘墓が調査された。このうちの一号墳丘墓は、

長方形墳丘の北側に突出部を備える初期古墳で、墳丘中央に箱形木棺を内蔵した主体部一基があつた。主体部内には、鉄斧と鉈が各一点副葬されていただけであつた。墳丘には周溝がめぐるが、突出部前面なく、墳丘裾に貼石も残つていた。墳丘からは、古式土師器と鉄斧が出土した。同じく古墳時代に属するのは、周溝のみの五号墳丘墓としたもので、周溝内から土師器が出土したが、墳丘が橢円形か隅丸方形と思われる。

この地区で最初に造営されたのが、三号墳丘墓で一三基の主体部が埋葬されている。墳丘の西側が祓川崖面によつて失われているので正確な規模と主体部数が不明であるが、現状の墳丘の西側に位置する唯一の箱式石棺墓が中央主体部らしいが、残念なことに完全に荒らされて鉄鎌二点が残つていたにすぎない。墳丘内に埋葬された主体部は、中央部の石棺の周囲に甕棺墓三基・石蓋土壙墓六基・木棺墓一基・土壙墓一基が配置され、副葬品が3号棺の甕棺内にガラス小玉があつた以外に若干の鉄器と供獻土器が出土した。三基の甕棺墓は、3号と8号棺が弥生終末古段階、10号棺が弥生終末新段階で、他棺の供獻土器にも弥生終末の中での新古の時間幅が認められる。墳丘は、中央部分に盛り土が認められ、その周辺の地山整形の基部からなる一段築成を形成しており、主体部が盛土部で最上層から掘り込まれている。

三号墳丘墓の埋葬が終わるころになつて、南側に二号墳丘墓、北側に四号墳丘墓が続けて造営されている。二号墳丘墓は、三号墳丘墓との間に明瞭な周溝などの区画を持たないが、1号棺とその西側を含む位置を墳頂とした盛り土を形成し、1号棺の大型箱式石棺とその西側にあつたであろう一棺の双方を盟主とした墳丘墓が想定できる。東側で古墳初期の一号墳丘周溝に切られていることから明らかに一号より先行するが、二号墳

丘墓も墳丘の西半分を失っているが、1号棺の石棺を中心に、半石棺一基・石蓋土壙二基・木蓋土壙一基の合計五基で構成され、1号棺からのみ副葬品として凹帯縁方格規矩鏡片・ガラス小玉・刀子が出土した。

四号墳丘墓は、三号墳丘墓の北側墳丘の一部を割裂して周溝を丘尾切断状に掘つて墳丘を橢円形に整形している。やはり墳丘中央部分に盛り土がなされ二段築成とするところは、他の墳丘墓と同じである。墳丘には、六基の箱式石棺墓と一基の土壙墓が埋葬されているが、土壙墓が埋葬形態が異質であるところから、主体部が石棺墓だけで構成されていた可能性が強い。副葬品は、1号棺以外が荒らされていて、中央部の4号棺から内行花文鏡・玉類・素環頭刀子、3号棺から鉄剣片・大型透孔付鉄鎌二点、墳頂部攪乱土から鉄剣片二点・鉄鎌が出土した。墳丘北東斜面に土器群が散乱しており、時期が弥生終末新段階であつた。

#### 遺構の詳細

徳永川ノ上遺跡の弥生終末から古墳初期の墳墓群は、C地区にI号～XI号墳墓群（第14図参考）

照）、D地区に一号～二号墳墓、E地区に一号～五号墳丘墓、E地区北端墳墓群の一基の合計一九基（群）の墳墓群が確認されたことになる（墳墓群一覧表）。これらの概要を前述したので、ここでは代表的な墳墓について少し詳しく紹介する。

#### I号墳墓群（第19図参照）

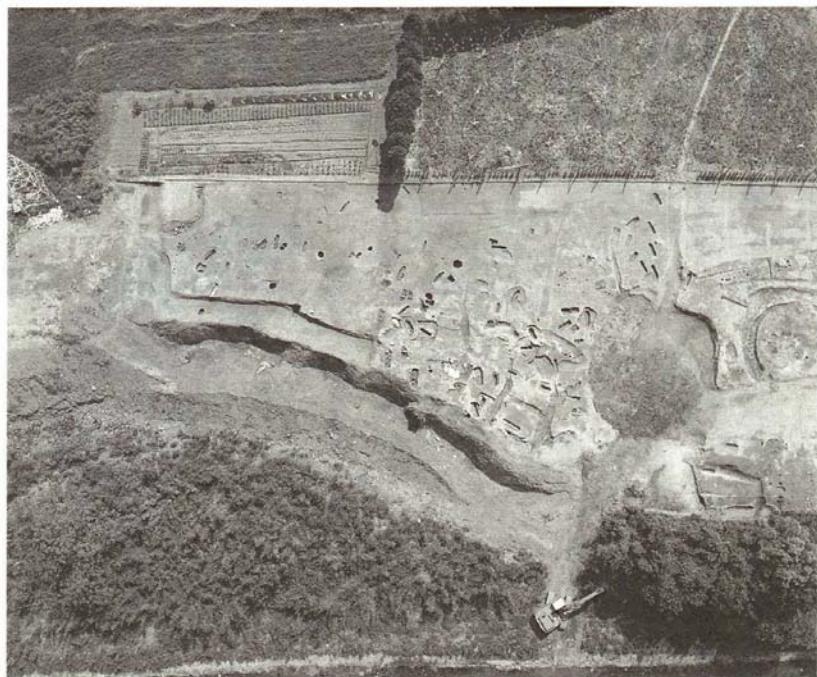
は、C地区で墳墓群の南端に位置し、3号～13号墓の一基で構成されている。

この一群は、丘陵の尾根線上を占有することもある、墓壙を完全に削平されているものが多いが、比較的棺内まで荒らされることがなかつたようだ。一群の北西側と北側に小礫を含む不整形土壙があり、これを一直線で結ぶと直角のL字形となり、墳墓群の北側縁辺と西側縁辺に並行する。したがつて、この三つの不整形土壙を周溝の深い部分が残存したものと考え、このI号墳墓群を南北径約一三・五メートル、東西径約一二・二メートルの

### 第3章 弥生時代

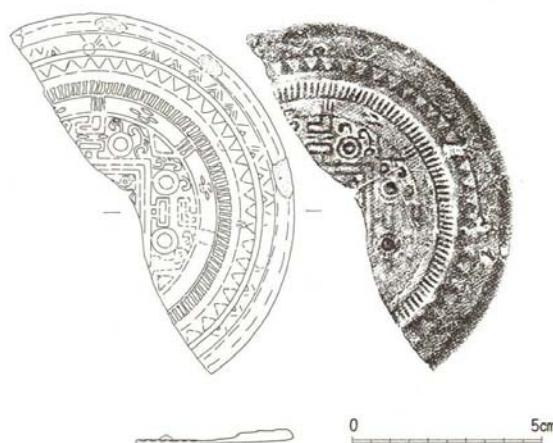
隅丸方形の墳丘墓と認定する。一群の中央よりやや南側に東西に走る小路があり、更に南東部が空白なのは削平によつて失われたものと思われる。一一基の主体部のうち、南端の7号墓のみ石蓋土壙墓で、10号墓が舟形木棺墓、12号墓が箱形木棺墓、その他が木蓋土壙墓であつた。副葬品は、この木蓋土壙墓に集中しており、棺内が荒らされていないことと、土壙壁面の保存のよいことから木蓋土壙墓と判断したもので、石蓋土壙墓であれば開墾された時点では棺内が荒らされるのが通例である。

5号墓は、削出枕を持ち、右脇に切先を足元に向けた鉄剣を副葬していた。鉄剣は全長三二・一二センチで、関部に二個の目釘穴を持つてゐる（第21図参照）。



第14図 德永川ノ上遺跡C地区墳墓群全景（福岡県教育委員会提供）

6号墓は、削出枕上に素環頭刀子、胸部に方格規矩渦文鏡片・刀子・鉄鎌を副葬していた。素環頭刀子は全長二一・四メートルで、環頭が梯形をし、柄が若干内反りを示す。方格規矩渦文鏡は、直径一〇・五センチメートルの鉤を含む半分以上を欠損する破鏡で、破面を除く全体が「手ずれ」による摩滅が著しく、文様面や鏡縁角に丸みがみられる。また、第15図の下部にあたる文様面には摩滅する前に铸造時の「湯冷え」がみられ、摩滅部分以上に文様が不鮮明となつてゐる。本鏡は鏡全体が、摩滅するほど使用された後に破鏡となつたらしく、破面にヤスリ状研磨痕が明瞭に観察できる。ヤスリ状研磨は、破損面を一度平坦にした後に、鏡面との角を面取りする形で二度実施されており、その後の摩滅が観察できない。すなわち、破鏡となつた直後に副葬されたことになる。鏡の文様は鉤座が直接方格となり、主文に渦文とTLV形があり、TLVがそろつてゐるもの、V形が単線で鈍角となつてゐる。銘帯はあるものの、銘文が省略されて列線文である。外区は、内側に鋸歯文、外側に複線波文の組み合わせである。鏡の型式は、後漢中期以後のものである。



第15図 I号墳墓群6号墓出土方格規矩渦文鏡（1/2）

8号墓は、削出枕をもち、頭部左側に三角縁画像鏡片

(第16図参照)、頭部中央よりやや左に勾玉と管玉三点、頭

部右側に水晶丸玉を中心にガラスの小玉と粟玉の一群、腹部の左右にガラス小玉の二群があり、それぞれ、両耳飾り

(第17図参照)と両手首飾りと思われる。胸部右側に刀子も

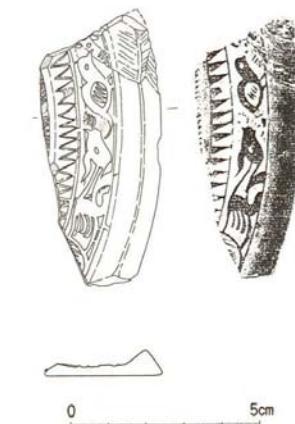
副葬されていた。三角縁画像鏡は、復原直径約二二一七・一ミトル

の大型鏡の外区のみの破片で、鏡縁と破面に「手ずれ」に

よる摩滅がみられるが、文様が鮮明で、鋳造時の微細な鋳型傷や研磨痕が観察できることから、破鏡となつて副葬されるまで短時間であつたと考える。

13号墓は、小路で破壊されて削出枕とその付近が残っていただけであつたが、枕上の両側に刀子各一点と、両耳飾りの玉類が副葬されていた。右耳飾りは、ヒスイ丸玉を中心に小形管玉一二点とガラス小玉四点で構成されていた。左耳飾りは、ヒスイ勾玉を中心に、ガラス管玉一点、ガラス小玉一五点から構成されている(第18図参照)。

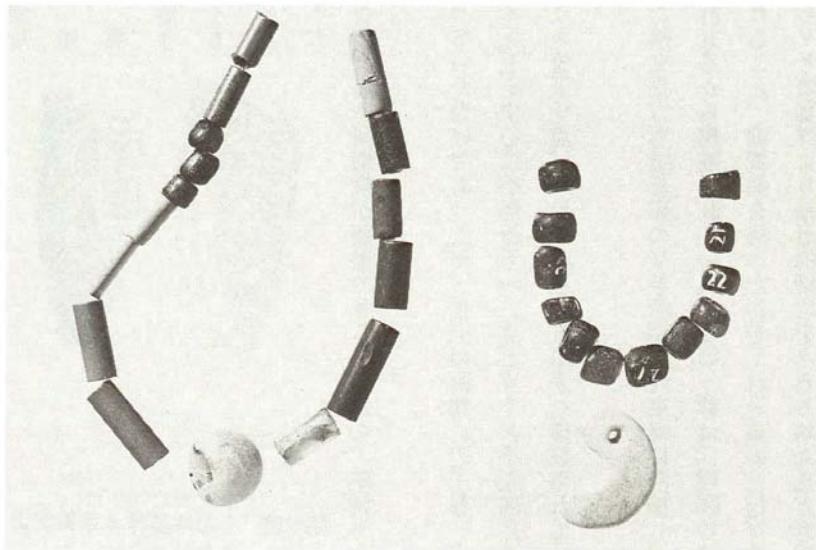
IV号墳墓群は、周溝を持ち墳丘をわずかに残していた隅丸長方形墳丘墓のV号墳墓群の東側に隣接し、箱式石棺墓一基・石蓋土壙墓三基・木蓋土壙墓一基の合計五基から構成されている。この一群は、周溝や墳丘が検出されなかつたものの、墓の全部が西枕で統一されること、副葬品を持った19号・21号墓の三棺が鼎立する位置にあつて盟主的位置を占めていることなどからV号墳墓群より地形的優位を占める隅丸長方形墳丘



第16図 I号墳墓群 8号墓出土  
三角縁画像鏡 (1/2)



第17図 I号墳墓群 8号墓出土耳飾り玉類



第18図 I号墳墓群 13号墓出土耳飾り玉類

墓と考える。墳丘墓の推定規模は、南北径約九・五メートル、東西径約八・メートル<sup>1</sup>の大きさとなる。

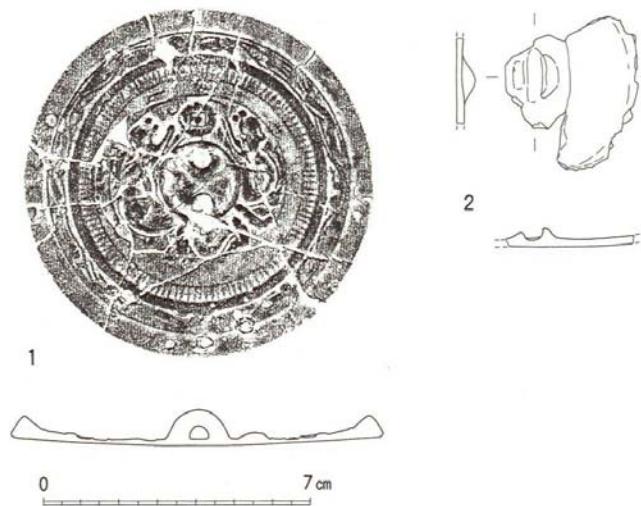
19号墓は、鼎立して墳丘の南西側を占める一基の石蓋土壙墓であるが、開墾時に棺中央部と頭部の一部が荒らされていた。一部荒らされた枕付近に三角縁盤龍鏡が散乱し、左胸部に刀子が副葬されていた(第21図参照)。この墓を石蓋と判断したのは、棺内が荒らされていたことと、壁面が石蓋の重みで崩壊していたことによる。三角縁盤龍鏡は副葬時に完形鏡と思われる直径九・八センチの小型鏡である。



第19図 C地区 I号墳墓群全景 (福岡県教育委員会提供)

(第20図の1参照)。文様構成は、鉢を中心に鉢から飛び出した左に龍、右に虎が五銖錢を間に置いて向き合っている。その外側の銘帯には「三羊作竟」で始まる七言句の銘文があるが、「手ずれ」と「湯冷え」によって大半が判読できない。外区は、内側に円圏、中央に画文帶、外縁が三角縁となっている。鏡式から後漢中期以後のものと考える。鏡は、全体に「手ずれ」によつて摩滅して丸みをおびてゐるが、その前に龍虎の足元から外側に「湯冷え」があり、銘帯の銘文と円細線が完全に失われてゐるので、外区の画像文も平坦なものとなつてゐる。なお、鏡の両面に赤色顔料、鏡面に布目痕が付着している。

20号墓は、墳丘の東側を占め、削出枕を備えた木蓋土壙墓で、上部を削平されているものの、棺内が荒らされていなかつた。棺内の胸部から玉類と刀子が出土した。玉類は、碧玉製微小勾玉・ガ



第20図

1. IV号墳墓群19号墓出土三角縁盤龍鏡 (1/2)

2. III号墳墓群出土小形仿製鏡 (1/2)

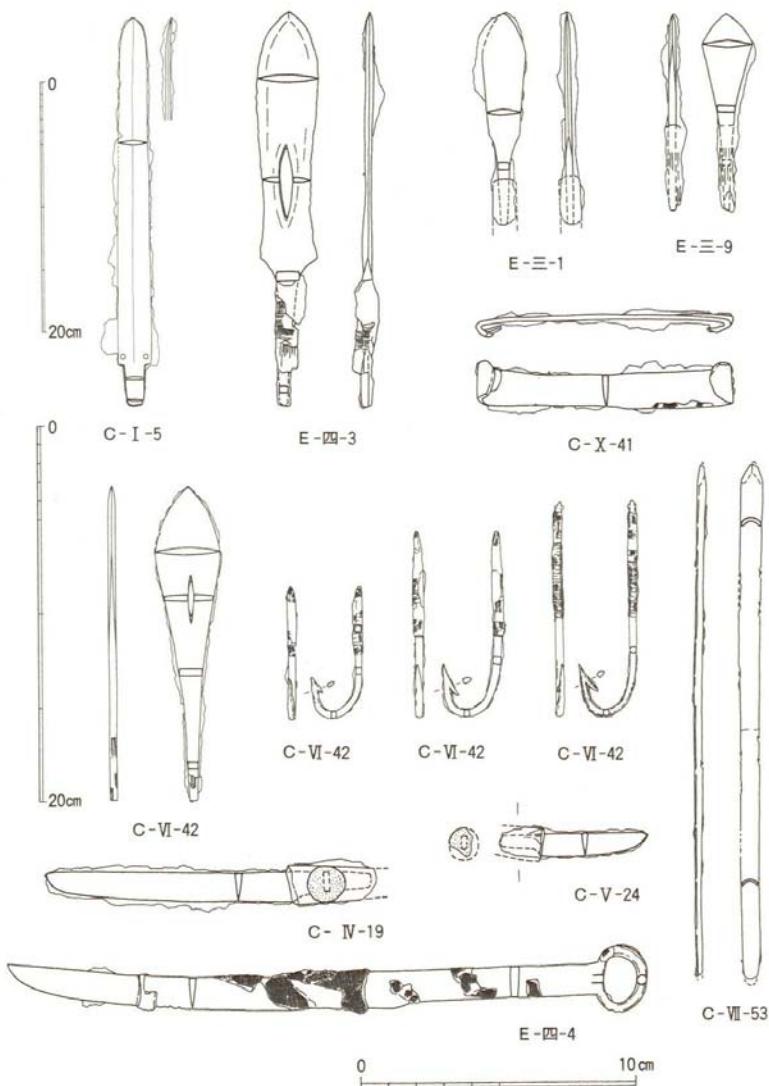
ラス丸玉・碧玉管玉各一点とガラス小玉九点から構成されている。

21号墓は、完全に石材の全部を抜かれた箱式石棺墓で、この一群で最も盟主的位置にあつたと考える。副葬品は、刀子刃部と茎片が出土したがいずれも大型に属し、19号墓に小型完形鏡が副葬されていたことを考へると、これも鏡が副葬されていたと考えるべきであろう。

VI号墳墓群は、隅丸長方形墳丘墓のV号墳墓群の南西周溝を切つて造られた一群であるが、四基のうちの1・2号墓が六世紀以後であることから、42号・43号墓の一基が墳丘墓の裾に営まれたことになる。

42号墓は、大型の石蓋土壙墓で、棺外の墓壙に超大型鉄製釣針五点・鉄鎌一点・土器二点、棺内に大型透孔付鉄鎌・刀子各一点を副葬していた（第21図参照）。釣針は、高さ七・五センチトルから一・四センチトルの超大型軸長形式で、ふところ幅も二・四センチトルから二・九センチトルと広い。また内鐵式で、鐵も大きいものとなつていて、軸には、小さいもので長さ三・五センチトル、大きいもので長さ五・五センチトルの間に纖維が巻き付けてあり、鉤ではなく明らかに釣針であることを示している。この釣針が超大型であることに加えて特記すべきことは、軸に丸造りが一点あることで、これまで丸造りの出現は古墳時代中期といわれていただけに、京築地域の鉄器における先進性がうかがえる。更に、棺内の透孔付鉄鎌も、長さ一六・八センチトルでこの類の最大級のもので、京都平野を中心に南が宮崎県、東が京都府、西が佐賀県、北が韓國釜山市に分布しているが、北部九州の中心部である糸島・福岡・唐津平野で現在のところみられない。本遺跡では九点出土し、一遺跡の出土数として最多である。供獻土器の時期は、弥生終末新段階である。

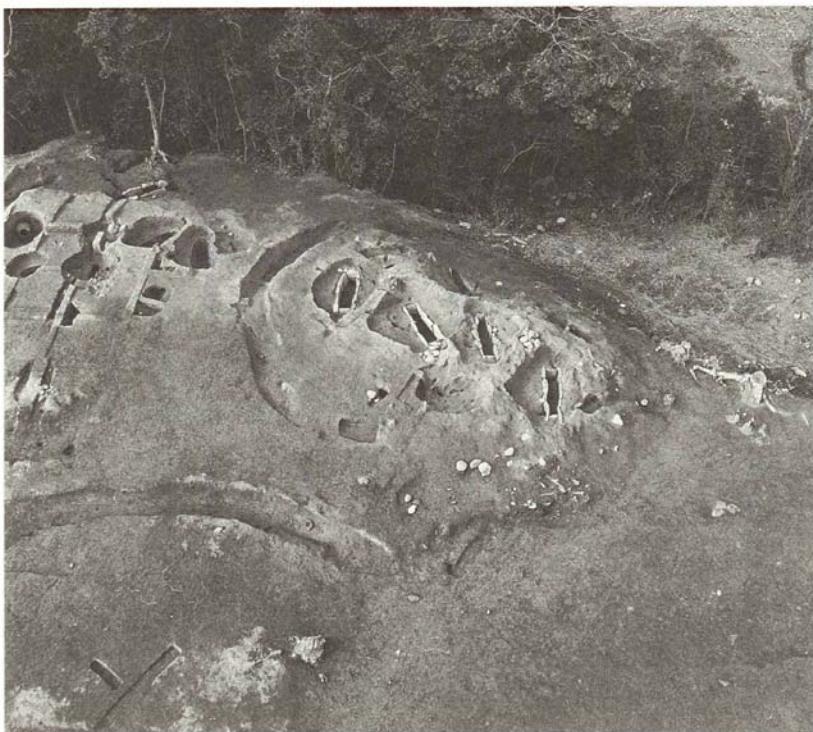
E地区四号墳丘墓は、弥生終末古段階の三号墳丘墓に断続して造営されたもので、南北径一二メートル、東西



第21図 墳墓群出土鉄器 (アルファベットは地区記号、ローマ数字は墳丘番号、アラビア数字は墳墓番号)

### 第3章 弥生時代

復原径一一メートルの橢円形墳丘を持っている。墳丘は、丘陵の南側を丘尾切斷状に弧状周溝によって切り離し、東側と北側を地山整形することによつて造成している。更に墳丘中央部には、周溝や地山掘削による余剰土を使用したと思われる厚さ七〇センチメートルの盛り土があり、墳丘が二段築成となつており、一号～三号墳丘墓と同様であつた。主体部がこの盛土部の二段目を中心に配置され、南北端の3号・5号～7号棺が一段目の地山整形部にかかることから、明りよう区別した段築構造ではない。主体部は、性格不明な6号棺以外の六基が箱式石棺墓で占め、小児用の7号棺以外が東西方向に統一して配置



第22図 E地区四号墳丘墓全景（福岡県教育委員会提供）

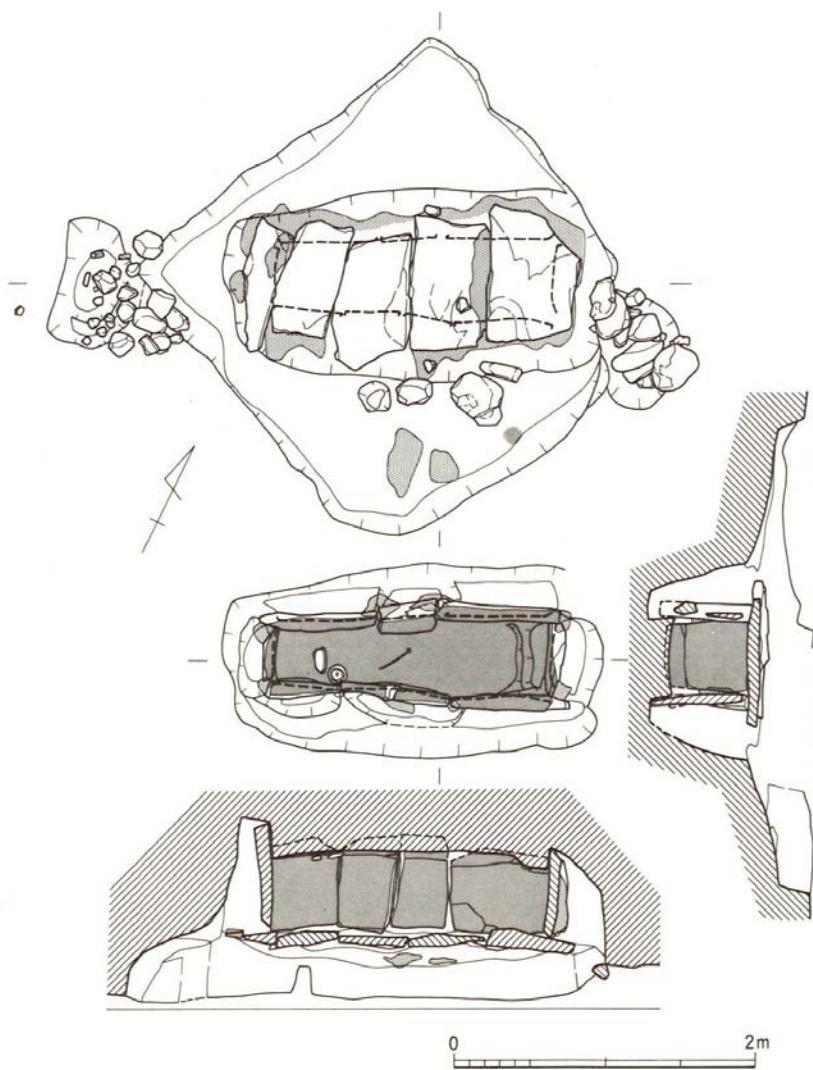
されている。

3号棺は、蓋石の全部がなく棺内の半分が荒らされていた唯一西枕の箱式石棺墓。棺内中央右側に移動した鉄剣約半分、左足側に大型透孔付鉄鎌二点が副葬されていた（第21図参照）。

4号棺は、墳丘中央にあって、石材も大型の安山岩板石に統一された優美な箱式石棺墓（第23図参照）であり、この墳丘墓の盟主的位置を占めることが外見からも看取できる。石棺は、中央部の蓋石一枚が盜掘によって移動し、頭部付近が荒らされ、棺外に管玉が散乱していた。しかし、棺内中央部から足元が保存されており、東枕の削出枕でなく、河原石枕があり、その右（南）側に完形の内行花文鏡が副葬され、石枕の周辺に人骨片も残っていた。また、棺内中央に素環頭刀子があり、この付近から東枕側にかけて管玉が散乱していた。

内行花文鏡（第24図参照）は、直径一二三センチの完形中型鏡で、蝙蝠鉢座間に「長宜孫子」、花文間に「位至<sup>三</sup>公」の銘文がある後漢中期以後の鏡である。鏡は、全体に「手ずれ」による磨滅が若干あり、鏡縁などに丸みがみられるが、鉢座などに鋳造後の研磨痕も観察できることから、「手ずれ」の磨滅が少ない方であろう。管玉（第25図参照）は、二九点全部がグリーンタフ製で、長さ五・一～一〇・七ミリの細形である。素環頭刀子は、全長二四センチ、刀身長一四センチの大きさで全体に細目の布目痕が付着している（第21図参照）。

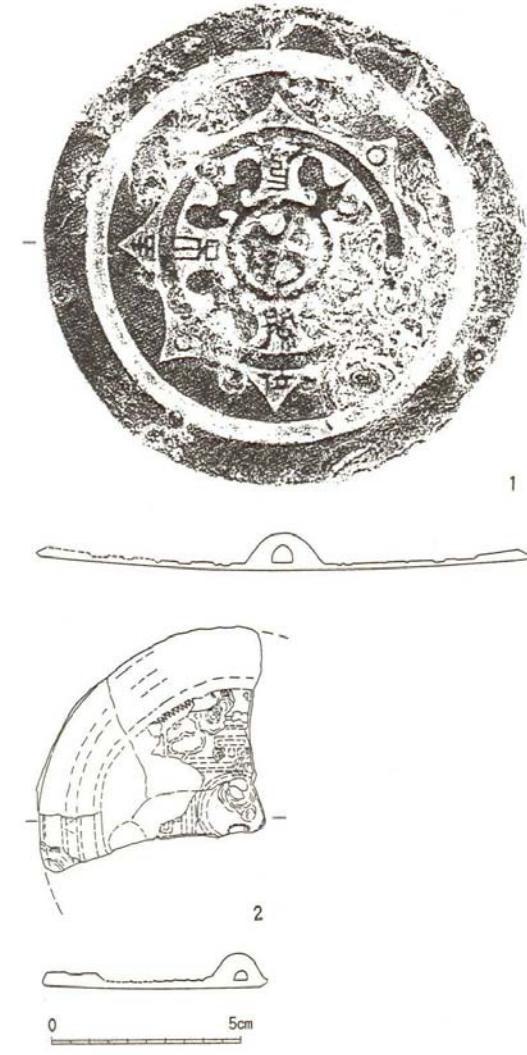
墳頂部表土からは鉄剣片二点と大型鉄鎌一点が出土しており、剣の一点が切つ先に近いことから、3号棺のものではなく、4号棺に剣が副葬されていた可能性をもつてゐる。なお、墳丘北東斜面に土器が散乱しており、供獻土器と考える。供獻土器の時期は、弥生終末新段階である。



第23図 E地区四号墳丘墓4号棺実測図 (1/50)

**遺跡の性格** 德永川ノ上遺跡は、弥生前期末から中期初頭の時期、次に中期末、そして弥生終末の時期と断続的に弥生人が生活している。徳永遺跡群では、弥生中期の墓地が居屋敷遺跡で発見されているが、川ノ上遺跡の近くにも存在するものと考える。弥生終末になると、集落と墓地が接近したらしく、最初は共存しているが、しだいに集落が移住して墓地に占有されている。この状況は、南側に隣接する神手遺跡でも同じで、しかも独立していた最大の竪穴住居跡地に墳墓群が営まれている。

徳永川ノ上墳墓群の特徴は、第一に独立した群構成をもち、その各群が一基の墳丘墓と考えられることで

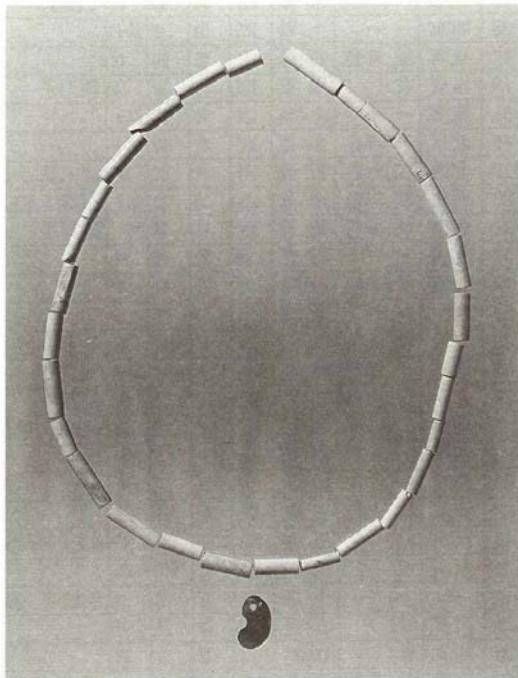


第24図

1. E地区四号墳丘墓4号棺出土内行花文鏡 (1/2)  
2. 同二号墳丘墓1号棺出土方格規矩鏡 (1/2)

ある。北部九州では、これまで墳丘墓が群構成をもつて確認された例がなく、その内容が問題になつてくる。しかも、近畿地方以東のように群を構成するだけでなく、造営された変遷がたどれることと、その集団の栄枯盛衰が把握できることにある。徳永川ノ上遺跡では、C地区とE地区双方でほぼ同時に墳丘墓が造営され始め、弥生終末古段階で双方が方形墳丘であつたのが、新段階に円形墳丘が出現し、古墳初期になつても方形墳丘が残存していることになる。C地区での順序は、I号・III号が古段階、V号・VI号・IX号・XI号が新段階、III号・VI号の一部が古墳時代に残る。E地区では、三号墳丘墓が古段階、二号・四号墳丘墓が新段階、一号・五号が古墳前期である。D地区では、二号墳墓が古墳前期で、一号墳墓が古墳前期である。ちなみに、神手遺跡墳墓群は、布留式甕棺墓が存在することから古墳前期に属する。

第二の特徴として、副葬品が豊富なことである。C地区では、弥生終末古段階に鏡片・小形仿製鏡・玉類・鉄器類を持ち、新段階に完形鏡を加えている。E地区では、弥生終末古段階に目立つ副葬品がないが、



第25図 四号墳丘墓 4号棺出土玉類

第1表 德永川ノ上墳墓群一覧表

No	主軸方位	床面	棺規模(床面) センチメートル					副葬品 (棺外)	時期	備考
			棺形式	主軸長	最大幅	頭位幅	深さ			
3	東	枕、赤色	木蓋	180	47	44	35+		弥生終末(古)	I号墳墓群
4	東	枕、赤色	木蓋	180	41	30	30+		弥生終末(古)	〃
5	西	枕、赤色	木蓋	178	45	36	38+	鉄劍	弥生終末(古)	〃
6	東	一、赤色	木蓋	171	35	30	45+	鏡片、素環頭刀子、鉄鏃片	弥生終末(古)	〃
7	東南	石枕、赤色	石蓋	157	35	32	42+		弥生終末(古)	〃
8	東北	枕、赤色	木蓋	163	42	37	39	鏡片、鐵刀子、玉(勾玉、管玉)	弥生終末(古)	〃
9	南東	枕	木蓋	150	38	31	37		弥生終末	〃
10	東南	枕、赤色	舟木棺	128	45	45	17+	小玉、管玉	弥生終末(古)	〃
11	南東	枕、赤色	木蓋	177	42	37	42	鉄鏃片(土器)	弥生終末	〃
12	南東	石枕	箱木棺	190	65	65+	14+		弥生終末(古)	〃
13	東南	枕、赤色	木蓋	60+	34	29	51	鐵刀子2、勾玉、玉類	弥生終末(古)	〃
14	東南	枕、赤色	石蓋	196	41	35	46			II号墳墓群
15	北西	石枕?	石蓋	177	34	28	40	鉄刀子(土器)	古墳前期	〃
16	北東	—	木蓋	200	64	46	50	(土器)	古墳前期	〃
38	南東	—	土壙	165	59	40	20+		弥生終末	〃
17	東南	枕、赤色	石蓋	111	25	20	42			III号墳墓群
18	南東	枕?	木蓋	173	43	30	50	鉄刀子		〃
64	東南	—	土壙	124	40	35	21+			〃
46	北東	— 赤色	木蓋	202	43	40	38+			〃
19	北西	枕、赤色	石蓋	174	41	32	39	鏡・鉄刀子	弥生終末(古)	IV号墳墓群
20	西北	枕、赤色	木蓋	164	35	20	32+	玉類(勾玉、管玉、小玉)鉄刀子	弥生終末(古)	〃
21	西南	枕、赤色	箱石	178	43	43	28+	鉄刀子	弥生終末(古)	〃
37	北西	—	石蓋	80	22	15	31		弥生終末(古)	〃
40	北西	枕、赤色	(石蓋)	83	24	21	10+		弥生終末(古)	〃
50	南	—	土壙	83	34	23	42		弥生終末(古)	落穴
22	北西	枕、赤色	箱石	167	45	42	44	鉄刀子(土器)	弥生終末(新)	V号墳墓群
23	西南	?、赤色	箱石	195	55+	42	45+		弥生終末(新)	〃
24	南西	— 赤色	箱石	163	52	50	50	鉄刀子	弥生終末(新)	〃標石
K2	西南		甕棺	120	56	46	56	鉄鏃、刀子(土器群)	古墳初期	〃標石
K3	南東		甕棺	56+	39+	28.5	39+		弥生終末	V号墳墓群
63	西北	— 赤色	土壙	89	21	18	4+			〃
28	南東	枕、赤色	石蓋	136	40	26	18			VI号墳墓群、標石
42	東北	枕、赤色	石蓋	202	50	27	45	鉄鏃・刀子(釣針5・鏃・土器)	弥生終末	〃 標石
1	東南	—	土壙	211	62	40	45		(古墳前期)	〃
2	東	—	土壙	232	78	78	51	鉄鏃2、鉄片	古墳後期	〃
25	南西	枕、—	石蓋	120	30	25	47			VII号墳墓群
26	西北	枕、—	(木蓋)	61	22	19	23			〃
43	北東	枕、赤色	石蓋	160	39	34	53	(素環頭刀子)		〃
44	西南	枕、赤色	石蓋	152	41	36	65	鉄鏃、素環頭刀子		〃

### 第3章 弥生時代

No	主軸方位	床面	棺規模(床面) サンポートル					副葬品 (棺外)	時期	備考
			棺型式	主軸長	最大幅	頭位幅	深さ			
47	南	一、赤色	土 壤	117	40	33	17+			VII号墳墓群
48	東	枕？	(石蓋)	165	38	30	50			夕
49	東南	枕、赤色	(石蓋)	168	33	30	36+			夕
51	東南	枕、-	(石蓋)	95	22	20	28+			夕
52	東南	枕、赤色	石 蓋	135	35	28	47			夕
53	西	枕、赤色	木 蓋	175	36	28	45	鉄鉈、鉄鎌		夕
54	南東	枕、赤色	木 蓋	152	48	40	65		弥生終末	夕
56	東南	枕、-	石 蓋	99	28	20	44			夕
57	南東	枕、-	石 蓋	74	24	24	33			夕
58	北東	枕、-	木 蓋	113	37	30	54			夕
60	南西	枕、-	石 蓋	126	29	26	41			夕
61	北西	枕	石 蓋	68	26	20	34			夕
27	北西	枕、赤色	木 蓋	182	37	30	28+	鉄鎌 2		VIII号墳墓群
29	西	枕、-	木 蓋	160	31	23	15+			夕
36	北東	礫床、-	礫 床	173	50	50	10+			夕
55		枕、赤色	木 蓋	152	29	22	31+			
30	西北	一、赤色	(木蓋)	149	29	20	36+			IX号墳墓群
31	西北	一、赤色	箱 石	207	62	45	54	鉄刀子、鉄鎌 2		夕
32	南東	一、赤色	箱 石	185	53	45	53	鉄刀子		夕
34	東南	枕、-	石 蓋	104	31	23	34			X号墳墓群
35	西北	床石、赤色	箱 石	184	45	43	37	鉄鉈(鉄斧)		夕
41	南東	枕、赤色	石 蓋	169	40	30	52	手鎌(土器)	弥生終末	夕
59	西北	- -	土壤?	65	25	12	13			X号墳墓群
39	東南	枕、赤色	石 蓋	100+	34	30	35			XI号墳墓群
62	西北	枕 -	土壤	66	18	14	5+	鉄刀子		夕
K4	南	一 赤色	甕 棺	50+	58	37.5	58			弥生終末
舟	東	一 赤色	舟形木	225	55	50	22	(土器片)鉄片	古墳前期	一号墳墓
1	東	- -	石 蓋	166	35	30	40		古墳前期	二号墳墓
2	南東	- -	石 蓋	102	26	15	28	管玉(土器)	古墳前期	夕
3	西北	-	(石蓋)	174	41	28	37		古墳前期	夕
1	北東	一 赤色	箱木棺	220	84	84	44	鉄鉈、鉄斧	古墳前期	一号墳丘墓
2	北	一 赤色	石 蓋	60	26	20	10		古墳前期	夕
石組	北東	- -		-	-	-	-		古墳前期	夕南西側に鉄斧
礫床	北		礫 床	150	34	34	6+			
1	西北	床石、赤色	箱 石	183	67	46	47	鏡片・玉・刀子	弥生終末(新)	二号墳丘墓
2	北東	枕、赤色	木 蓋	188	42	36	43		弥生終末(新)	夕
3	南東	枕、赤色	石 蓋	171	37	30	35		弥生終末(新)	夕

No	主軸方位	床面	棺規模(床面) サイズ				副葬品 (棺外)	時期	備考
			棺形式	主軸長	最大幅	頭位幅			
4	東	枕、赤色	箱 石	50+	37	35	42		弥生終末(新) 二号墳丘墓
5	東	— —	石 蓋	155	28	19	38		弥生終末(新) ム
1	北東	枕、赤色	箱 石	160	55	37	51	鉄鎌 2	弥生終末(古) 三号墳丘墓
2	東	枕、赤色	石 蓋	160	33	18	48	(土器)	弥生終末 ム
3	東北	— 赤色	甕 棺					玉(鉄刀子)	弥生終末(古) ム
4	西北	枕、赤色	石 蓋	156	35	28	37	鉄鎌(土器)	弥生終末(古) ム
5	西	枕、赤色	石 蓋	60	18	15	20		弥生終末 ム
6	北西	枕、赤色	石 蓋	67	22	18	30		弥生終末 ム
7	西北	— 赤色	石 蓋	55	18	17	29		弥生終末 ム
8	東	— 赤色	甕 棺	48					弥生終末(古) ム 穿孔
9	東南	— —	土 墓	210+	37	26	24	鉄鎌	ム
10	南西	— —	甕 棺	85+				(土器)	弥生終末 ム
11	南西	— 赤色	(石蓋)	149	58-	35	30		弥生終末 ム 人骨片
12	東	— —	(割竹)	220	34	34	22+		弥生終末 ム
13	東	— —	箱 木	208	35	35	14+		弥生終末 ム
1	東	枕、赤色	箱 石	174	48	37	44	刀子、鉄鉈(土器)	弥生終末(新) 四号墳丘墓標石
2	東北	枕、赤色	箱 石	190	50	50	48		弥生終末(新) ム
3	西	枕、赤色	箱 石	175	43	43	41	鉄劍、鉄鎌 2	弥生終末(新) ム
4	東北	枕、赤色	箱 石	185	55	54	55	鐵玉類、類刀子、(銅先中位)	弥生終末(新) ム 標石
5	東	?、赤色	箱 石	188	60	47	50		弥生終末(新) ム 標石
6	南	— —	土 墓	151	53	50	30+		弥生終末(新) ム
7	北西	? ?	箱 石	70	24	24	22		弥生終末(新) ム
1	南東	枕 —	木 蓋	173	31	25	11+		弥生終末(新) E地区北端
2	南東		(石室)	130	40	40	20	鉄鎌、刀子 2	古墳初期 ム

新段階に確実に完形の中型鏡を保有している。さらにC地区では、IV号・V号・IX号・X号墳墓群、E地区では三号墳丘墓1号棺などの各墳墓の盟主棺が荒らされて副葬品の内容の不明な点が惜しまれ、鏡が副葬されていた可能性が強い。

第三の特徴は第二にも含まれるが、副葬品の鉄器にも大きな画期が看取できる。その一つが、超大型鉄製釣針の出現であり、これに二つの新技術が加わっている。新技術の一つが超大型化であり、二つ目が丸造軸の出現である。釣針の発達を段階でたどると、鐵の出現、内鐵の出現、鐵器化、大型化、超大型化、丸造軸の出現であるが、徳永川ノ上遺跡の釣

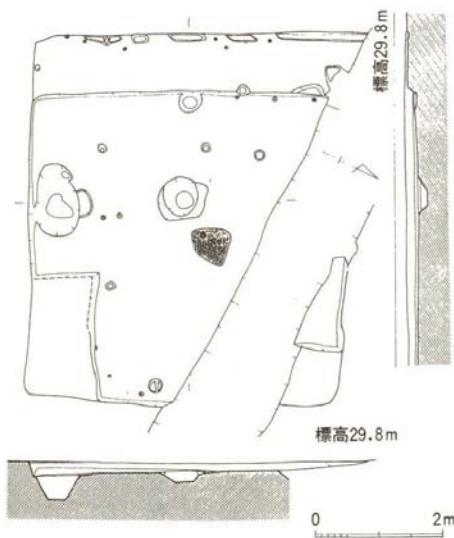
針が弥生終末において一気に近代化を達成している。鉄器の二つ目は、VI号墳墓群42号墓で紹介した大型透孔付鉄鎌で、機能的には大きな透孔をもつことから流体力学を駆使し、破壊力を増加した鎌、または大型であることから儀仗品と考えるが、分布の中心が京都平野にあることがわかつてきた。

### 集落の調査

当遺跡の集落関連の遺構には、竪穴住居跡二〇軒・貯蔵穴三五基と井戸がある。これらの遺構は主に三つの時期に分かれるが、遺物が出土していない遺構もあり、時期の明確な遺構は限られている。前期末から中期初頭の遺構としては、貯蔵穴の大部分と土壙で、この時期の遺物を出土する住居跡はない。なお、床面がほぼ円形の形態の住居跡はB地区で二軒ある。遺構の分布状況は、遺跡の南部から中央部のA・B・C地区を中心として広がる傾向が強い。

中期末の遺構にはB地区3号住居跡がある。この住居跡内からは炭層や焼土層が検出され、炭化米も出土しており、焼失家屋の可能性が考えられる。

後期後半から終末期の住居跡は、基本的に方形の平面形をなし、中央部に炉跡、一辺の中央壁際に屋内土壙、その左右両側の相対する辺にベッド状遺構が設けられている。主柱穴が四本の住居跡



第26図 德永川の上遺跡C地区1号住居跡  
実測図 (1/100)

もあるが、二本の住居跡が多い。各住居跡の規模は、一辺が四~五・五メートル前後であり、特に大型の住居はない。C地区1号住居跡は、床面が長さ五・六メートル、幅五・三メートルの長方形の平面形をなし、ベッド状遺構・屋内土壙・炉跡を持ち、主柱穴は二本と考えられる。出土遺物からみて、後期後半から終末の時期の住居跡である(第26図)。この時期の住居跡は、中央部から北部にかけてのC・D・E地区に集中する傾向がある。

## 二 金築遺跡

金築遺跡は祓川の沖積作用によって形成された豊津町北部の平野の北西部に位置する。この平野の西部には豊津丘陵が北方に延びている。遺跡はこの平野内の小河川によつて削り残された微高地上にあり、標高は二六メートル前後である。東側の祓川までは約一・二メートル、西側の丘陵地までは約〇・一メートルの距離がある。

周辺の弥生時代の遺跡としては、西側約一メートルの甲塚北部から八景山を経て、行橋市竹並南部の丘陵地には前期・中期の集落や墓地が広く分布する。また、東側約一・二メートルの祓川右岸の段丘上には同時期の集落が確認されている。なお、当遺跡の所在地は大字惣社字金築・字宮ノ下である。

**調査経過と遺跡の概要**  
調査対象地は水田であり、遺跡は農村基盤総合整備パイロット事業の区画整理に先立つて調査された豊前国府推定地範囲内で確認された。

調査は基本的に赤土の地山面と東辺部の黒色包含層の上面で遺構の検出を行なが進めたが、黒色包含層の分布する場所では、部分的にその下の地山面で再度遺構の検出を行つた。

発掘調査は昭和六十三年四月五日から九月二十日までの五か月余りに及び、設定した調査区は南北の長さ